

やまだ こうさく
 ♪ 山田 耕筰 (1886-1965)

作曲家、指揮者として、日本の西洋音楽の基礎づくりに、創作と演奏の両面で貢献。日本語のアクセントを生かした童謡も数多く作曲した。

■代表曲

「赤とんぼ」「この道」「からたちの花」

■こんな人物

キリスト教徒の家庭に育ち、幼いころから讃美歌に親しんだ。また、長姉・恒の夫である宣教師エドワード・G・ガントレットにより、西洋音楽の基礎に触れた。

東京音楽学校卒業後、東京音楽院講師などを経て、明治43年(1910)岩崎小彌太(1879-1945)の援助でベルリン王立アカデミー高等音楽院に留学。卒業作品として日本人による初の交響曲「かちどきと平和」を作曲し(1912)、日本の交響曲の歴史の扉を開いた。

また、劇作家・演出家の小山内薫(1881-1928)と親交があった山田は、演劇や舞踊にも大いに関心を寄せていた。そして、音楽と演劇と舞踊が融合した「舞踊詩」という独自のジャンルを創出し、大正期を中心にその作品を創作している。

ところで、大正期は「童謡運動」が盛り上がりを見せた。これは、唱歌は芸術性に欠け、子どもの情操教育によくないとする考えによるもので、鈴木三重吉(1882-1936)らが推進した。こうした運動のもと、山田は、詩と音楽の融合を目指し、大正11年(1922)9月、北原白秋(1885-1942)とともに雑誌『詩と音楽』を創刊。詩の語調や言葉のアクセントを生かした、芸術性の高い童謡を多数作曲した。特に、高座郡茅ヶ崎町に転居した大正15年(1926)頃は、集中的に童謡の創作に取り組み、昭和2年(1927)には、「赤とんぼ」を含む『山田耕作童謡百曲集 vol.1』

を発表した。茅ヶ崎の地で多くの童謡が作曲されたことを記念して、現在市内3か所に記念碑等が建てられている。

昭和11年(1936)には、フランス政府よりレジオン=ドヌール勲章を、昭和31年(1956)には、文化勲章を受けた。

なお、名の表記について、昭和5年(1930)に「耕作」から「耕笹」に改名している。

■生没年

明治19年(1886)、東京市本郷区(現・文京区本郷)に生まれ、翌年から明治25年(1892)までの間、横須賀で過ごす。昭和40年(1965)没、享年79歳。西多摩霊園に眠る。

なお、最後の入院時の主治医は聖路加国際病院の日野原重明(1911-2017)医師であった。同医師著『死をどう生きたか』には入院時の様子や思い出が綴られている。

♪ 参考文献

- ・『自伝はるかなり青春のしらべ』山田耕笹著 長嶋書房 1957 [762.1/4]
- ・『この道：山田耕笹伝記』日本楽劇協会編 恵雅堂 1982 [762.1/319]
- ・『死をどう生きたか：私の心に残る人びと』日野原重明著 中央公論社 1983(中公新書) [490.4/111]
- ・『山田耕笹：自伝 若き日の狂詩曲』山田耕笹著 日本図書センター 1999(人間の記録102) [762.1/183]
- ・『山田耕笹：作るのではなく生む』後藤暢子著 ミネルヴァ書房 2014(ミネルヴァ日本評伝選) [762.1/300]
- ・「山田耕笹」(『茅ヶ崎を彩った70人』茅ヶ崎市史編集委員会編 茅ヶ崎市 2017) [K28.53/42]